

ひかるの石は心の中心にあるのです

2年 M・Mさん

楓くんがひろつた「ひかる石のおはなし」だけだ、この本は、石のお話ではなくて、心のお話です。

大すきなママがいなくなつて、すびくさひしかつた時に、「お母さんには、もう二度と会えないんだよ。」と、本のうのこを言われたら、どなたかにひろつてくれないだろう。楓くんの心の中に、大きなかなじみのかたまりができて、声が出なくなったのも、なんだかわかる気がします。

そんな気もちの時、ふしぎなひかる石を見つけて、手のひらにのせて、石が「なにちは」ってしゃべったら、わたしだって、うれしくなつて、走つて家に帰るだろうな。

大じなからものの、ひかる石と話しているうちに、楓くんがお父さんや友だちとも、元気に話せるようになって、本とうにふかつたのです。

「せしかしたら、もしかしたら、あ、あの田の石から聞かえてきたのは、ママの声だったのかもしれない」というところが、わたしは大すきです。読んでいて、なみだが出てきました。きつと、ママだって、楓くんとたくさんお話したくて、しかたないだろうと思つたからです。

わたしのほいく園のお友だちも、楓くんと同じで、そつ園じきの前にお母さんがいなくなりました。「もしも、わたしのママがいなくなつて、もう会えなくなつたら。」とかんがえるのと、どもかなしく、どつてもわくなくなつてしまいました。

だから、がんばれ。「とか」「だじぶらうぶだぶ。」って声をかけると、お友だちが、お母さんを思い出して、さびしくなつてしまつと思つたから、みんなでそつとおうえんするのこにしました。きつと、その時のみんなには、見えないし、しゃべらないけれど、心の中になじきな石があつて、かすかにひかつていたと思います。大きくなつても、さびしくさや、だれかをもう心をおもひにして、心の中にひかる石をもつていたいと思つます。